

## 第 IX 部 母平均の差の検定

## 目次

第IX部	母平均の差の検定	1
9	母平均の区間推定	4
9.1	はじめに	4
9.1.1	ポイント	4

---

9.1.2	期待値と分散	5
9.2	独立な 2 つの確率変数	6
9.2.1	$X + Y$ の期待値	7
9.2.2	$X + Y$ の分散	9
9.2.3	母集団と標本平均	13
9.2.4	正規母集団	13
9.2.5	正規分布	14
9.2.6	標準化	14
9.2.7	正規分布の 95% 信頼区間	15
9.3	不偏分散	16
9.4	$\chi^2$ 分布	23

---

---

9.5	$t$ 分布 ······	24
9.5.1	標本平均 ······	25
9.5.2	標本分散 ······	25
9.5.3	$\chi^2$ 統計量 ······	26
9.5.4	標本分散を使った $t$ 分布 ······	28
9.6	母平均の差の区間推定 ······	30
9.6.1	母分散が既知の場合 ······	30
9.6.2	母分散が未知の場合 ······	32
9.7	まとめ ······	34

# 9 母平均の区間推定

## 9.1 はじめに

- 平均値の差の検定では平均値の差があるかどうかが判断されます。
- 差があると分かっている状況で、その差がどの程度なのかを推定します。

### 9.1.1 ポイント

- 母分散が既知の場合の平均値の差の区間推定
- 母分散が未知の場合の平均値の差の区間推定

### 9.1.2 期待値と分散

定義

確率変数  $X = x_i$  と  $\Pr(x_i) = p_i$  の積の総和を『期待値』といい、 $E(X)$  であらわす。

$$E(X) = \sum_{i=1}^n x_i p_i \quad (1)$$

定義

確率変数  $X = x_i$  の期待値  $E(X)$  からの偏差の二乗の期待値を『分散』といい  $V(X)$  であらわす。

$$V(X) = E(X - E(X))^2 \quad (2)$$

## 9.2 独立な 2 つの確率変数

2 つの独立な確率変数  $X, Y$  を考える。

$$X = x_i \quad ; i = 1, 2, \dots, n \quad (3)$$

$$Y = y_j \quad ; j = 1, 2, \dots, m \quad (4)$$

とし、それぞれの確率を

$$\Pr(x_i) = p_i \quad (5)$$

$$\Pr(y_j) = q_j \quad (6)$$

とする。すると、

$$\sum_{i=1}^n p_i = 1 \quad (7)$$

$$\sum_{j=1}^m q_j = 1 \quad (8)$$

であって、 $X$  と  $Y$  の同時確率は

$$\Pr(x_i, y_j) = p_i q_j \quad (9)$$

である。

### 9.2.1 $X + Y$ の期待値

$X + Y$  の期待値を求める。

$$\mathbb{E}(X + Y) = \sum_{i=1}^n \sum_{j=1}^m (x_i + y_j) p_i q_j \quad (10)$$

$$= \sum_{i=1}^n \left( \sum_{j=1}^m (x_i + y_j) p_i q_j \right) \quad (11)$$

$$= \sum_{i=1}^n p_i \left( \sum_{j=1}^m (x_i + y_j) q_j \right) \quad (12)$$

括弧内総和部分を展開し、

和の総和を総和の和であらわし

$$= \sum_{i=1}^n p_i \left( \sum_{j=1}^m x_i q_j + \sum_{j=1}^m y_j q_j \right) \quad (13)$$

括弧内第 1 項からは共通因数として  $x_i$  を  $j$  に関する総和から書き出し、第 2 項は  $Y$  の期待値なので

$$= \sum_{i=1}^n p_i \left( x_i \sum_{j=1}^m q_j + \mathbb{E}(Y) \right) \quad (14)$$

$q_j$  の総和は 1 なので

$$= \sum_{i=1}^n p_i (x_i + \mathbb{E}(Y)) \quad (15)$$

総和内を展開し

$$= \sum_{i=1}^n (x_i p_i + p_i \mathbb{E}(Y)) \quad (16)$$

和の総和を総和の和であらわし

$$= \sum_{i=1}^n x_i p_i + \mathbb{E}(Y) \sum_{i=1}^n p_i \quad (17)$$

第 1 項は  $X$  の期待値であり、第 2 項の総和部分は  $p_i$  の総和なので 1 だから

$$= \mathbb{E}(X) + \mathbb{E}(Y) \quad (18)$$

9.2.2  $X + Y$  の分散

## 補題 1

$$\mathbb{E}(XY) = \sum_{i=1}^n \sum_{j=1}^m x_i y_j p_i q_j \quad (19)$$

$$= \sum_{i=1}^n \left( x_i p_i \sum_{j=1}^m y_j q_j \right) \quad (20)$$

括弧内総和部分は  $Y$  の期待値なので

$$= \sum_{i=1}^n (x_i p_i \mathbb{E}(Y)) \quad (21)$$

期待値は定数なので総和の外に書き出す。

$$= \mathbb{E}(Y) \sum_{i=1}^n (x_i p_i) \quad (22)$$

括弧内総和部分は  $X$  の期待値なので

$$= \mathbb{E}(X) \mathbb{E}(Y) \quad (23)$$

## 補題 2

$$\mathbb{E}(X - \mathbb{E}(X))(Y - \mathbb{E}(Y)) = \mathbb{E}(XY - X\mathbb{E}(Y) - Y\mathbb{E}(X) + \mathbb{E}(X)\mathbb{E}(Y)) \quad (24)$$

$$= \mathbb{E}(XY) - \mathbb{E}(X)\mathbb{E}(Y) - \cancel{\mathbb{E}(X)\mathbb{E}(Y)} + \cancel{\mathbb{E}(X)\mathbb{E}(Y)} \quad (25)$$

$$= \mathbb{E}(XY) - \mathbb{E}(X)\mathbb{E}(Y) \quad (26)$$

$$= \mathbb{E}(X)\mathbb{E}(Y) - \mathbb{E}(X)\mathbb{E}(Y) \quad (27)$$

$$= 0 \quad (28)$$

**$X + Y$  の分散**

$$\text{V}(X + Y) = \mathbb{E} \left( \left( (X + Y) - \mathbb{E}(X + Y) \right)^2 \right) \quad (29)$$

$$= \mathbb{E} \left( \left( X + Y - \mathbb{E}(X) - \mathbb{E}(Y) \right)^2 \right) \quad (30)$$

$$= \mathbb{E} \left( \left( (X - \mathbb{E}(X)) + (Y - \mathbb{E}(Y)) \right)^2 \right) \quad (31)$$

$$= \mathbb{E} \left( (X - \mathbb{E}(X))^2 + 2(X - \mathbb{E}(X))(Y - \mathbb{E}(Y)) + (Y - \mathbb{E}(Y))^2 \right) \quad (32)$$

和の期待値を期待値の和であらわし

$$= \mathbb{E} \left( (X - \mathbb{E}(X))^2 \right) + 2\mathbb{E} \left( (X - \mathbb{E}(X))(Y - \mathbb{E}(Y)) \right) + \mathbb{E} \left( (Y - \mathbb{E}(Y))^2 \right) \quad (33)$$

第 1 項と第 3 項はそれぞれ分散であり、第 2 項は補題 2 より 0 だから

$$= \text{V}(X) + \text{V}(X) \quad (34)$$

定理

$X, Y$  を独立な確率変数とする。期待値と分散に関して以下の関係が成り立つ。

$$\mathbb{E}(X + Y) = \mathbb{E}(X) + \mathbb{E}(Y) \quad (35)$$

$$\text{V}(X + Y) = \text{V}(X) + \text{V}(Y) \quad (36)$$

### 9.2.3 母集団と標本平均

母集団の分布に関わらず、十分に大きなサンプル・サイズをとった標本の標本平均は正規分布に従う。母平均を  $\mu$ 、母分散を  $\sigma^2$  とする。サンプル・サイズが  $n$  の標本平均を  $\bar{X}$  であらわすと、

$$\mathbb{E}(\bar{X}) = \mu \quad (37)$$

$$\text{V}(\bar{X}) = \frac{\sigma^2}{n} \quad (38)$$

である。

### 9.2.4 正規母集団

正規分布  $N(\mu, \sigma^2)$  に従う母集団を『正規母集団』という。

正規母集団から抽出されたサンプル・サイズ  $n$  の標本の標本平均  $\bar{X}$  は

$$N\left(\mu, \frac{\sigma^2}{n}\right) \quad (39)$$

に従う。

$$\bar{X} \sim N\left(\mu, \frac{\sigma^2}{n}\right) \quad (40)$$

### 9.2.5 正規分布

確率変数  $X = x$  が標準正規分布に従う確率変数  $Z = z$  を用いて、

$$x = \mu + \sigma z \quad ; \sigma \neq 0 \quad (41)$$

とあらわせるとき、確率変数  $X$  は、平均  $\mu$ , 分散  $\sigma^2$  の正規分布であるといい、 $N(\mu, \sigma^2)$  とあらわす。

### 9.2.6 標準化

確率変数  $X$  が正規分布  $N(\mu, \sigma^2)$  に従うとき、 $\mu, \sigma$  を用いて、

$$z = \frac{x - \mu}{\sigma} \quad (42)$$

をつくると、 $z$  は標準正規分布  $N(0, 1)$  に従う。

### 9.2.7 正規分布の 95% 信頼区間

標準正規分布  $N(0, 1)$  に従う確率変数  $Z = z$  の信頼区間は

$$-1.96 \leq z_i \leq 1.96 \quad (43)$$

である。

$$x \sim N(\mu, \sigma^2) \quad (44)$$

のとき 95% 信頼区間は

$$-1.96 \leq \frac{x_i - \mu}{\sigma} \leq 1.96 \quad (45)$$

なので、

$$\mu - 1.96\sigma \leq x_i \leq \mu + 1.96\sigma \quad (46)$$

## 9.3 不偏分散

正規母集団  $N(\mu, \sigma^2)$  からサンプル・サイズ  $n$  の標本を抽出する。抽出された標本の平均を『**標本平均**』といい  $\bar{X}$  であらわす。 $i$  番目の標本  $A$  の要素を  $x_i \in A$  であらわすと、標本平均は

$$\bar{X} = \frac{1}{n} \sum_{x_i \in A}^n x_i \quad (47)$$

である。

仮定により母平均は  $\mu$ , 母分散は  $\sigma^2$  である。ここで

$$\mathbb{E} \left( \sum_{x_i \in A}^n (x_i - \bar{X})^2 \right) \quad (48)$$

を考える。

$$\mathbb{E} \left( \sum_{x_i \in A}^n (x_i - \bar{X})^2 \right) = \mathbb{E} \left( \sum_{x_i \in A}^n (x_i - \mu + \mu - \bar{X})^2 \right) \quad (49)$$

$$= \mathbb{E} \left( \sum_{x_i \in A}^n ((x_i - \mu) + (\mu - \bar{X}))^2 \right) \quad (50)$$

$$= \mathbb{E} \left( \sum_{x_i \in A}^n (x_i - \mu)^2 + \sum_{x_i \in A}^n 2(x_i - \mu)(\mu - \bar{X}) + \sum_{x_i \in A}^n (\mu - \bar{X})^2 \right) \quad (51)$$

$$= \mathbb{E} \left( \sum_{x_i \in A}^n (x_i - \mu)^2 + 2(\mu - \bar{X}) \sum_{x_i \in A}^n (x_i - \mu) + n(\mu - \bar{X})^2 \right) \quad (52)$$

和の期待値は期待値の和なので

$$= E \left( \sum_{x_i \in A}^n (x_i - \mu)^2 \right) + E \left( 2(\mu - \bar{X}) \sum_{x_i \in A}^n (x_i - \mu) \right) + E \left( n(\mu - \bar{X})^2 \right) \quad (53)$$

ここで、第1項は  $i$  ごとに母分散の定義  $E((x_i - \mu)^2) = \sigma^2$  より、 $n\sigma^2$ 。

第2項総和部分は

$$\sum_{x_i \in A}^n (x_i - \mu) = \sum_{x_i \in A}^n x_i - n\mu \quad (54)$$

$$= n\bar{X} - \mu \quad (55)$$

$$= n(\bar{X} - \mu) \quad (56)$$

$$= -n(\mu - \bar{X}) \quad (57)$$

よって第2項は

$$E(2(\mu - \bar{X})(-n(\mu - \bar{X}))) = -2nE((\mu - \bar{X})^2) \quad (58)$$

$$(59)$$

上記から (53) は

$$= n\sigma^2 - 2nE((\mu - \bar{X})^2) + nE((\mu - \bar{X})^2) \quad (60)$$

$$= n\sigma^2 - nE((\mu - \bar{X})^2) \quad (61)$$

(61) 第2項期待値部分は標本平均  $\bar{X}$  の分散なので  $V(\bar{X})$  とあらわすと

$$V(\bar{X}) = V\left(\frac{x_1 + x_2 + \cdots + x_n}{n}\right) \quad (62)$$

$$= \frac{1}{n^2} V(x_1 + x_2 + \cdots + x_n) \quad (63)$$

各  $x_i$  は独立なので分散の和に分解すると

$$= \frac{1}{n^2} (V(x_1) + V(x_2) + \cdots + V(x_n)) \quad (64)$$

定義により  $V(x_i) = \sigma^2$  なので

$$= \frac{1}{n^2} n \sigma^2 \quad (65)$$

$$= \frac{\sigma^2}{n} \quad (66)$$

よって (48) は

$$n \sigma^2 - n \times \frac{\sigma^2}{n} = n \sigma^2 - \sigma^2 \quad (67)$$

$$= (n-1) \sigma^2 \quad (68)$$

上記の結果から

$$\mathbb{E} \left( \sum_{i=1}^n (x_i - \bar{X})^2 \right) = (n-1) \sigma^2 \quad (69)$$

右辺の  $(n-1)$  を払うと

$$\sigma^2 = \frac{\mathbb{E} \left( \sum_{i=1}^n (x_i - \bar{X})^2 \right)}{n-1} \quad (70)$$

$$= \mathbb{E} \left( \frac{\sum_{i=1}^n (x_i - \bar{X})^2}{n-1} \right) \quad (71)$$

この期待値括弧内の値を  $s^2$  であらわし、『**不偏分散**』という

### 定義

サンプル・サイズ  $n$  の標本の  $i$  番目の要素を  $x_i$  とし、 $\bar{X}$  を標本平均とする。このとき

$$s^2 = \frac{\sum_{x_i \in A} (x_i - \bar{X})^2}{n-1} \quad (72)$$

を『**不偏分散**』といい、 $n-1$  を自由度という。

不偏分散の期待値は (71) より  $\sigma^2$  である。

## 9.4 $\chi^2$ 分布

標準正規分布  $N(0, 1)$  に従う  $n$  個の独立な確率変数  $z_1, z_2, \dots, z_n$  の平方和をつくり  $\chi_{(z)}^2$  とあらわす。

$$\chi_{(z)}^2 = \sum_{i=1}^n {z_i}^2 \quad (73)$$

このとき、 $n$  を『自由度』といい  $\nu$  であらわす。そして  $\chi_{(z)}^2$  の従う分布を『自由度  $\nu = n$  の  $\chi^2$  分布』という。

## 9.5 $t$ 分布

標準正規分布  $N(0, 1)$  に従う確率変数  $z$  と、これとは独立に自由度  $\nu = n$  の  $\chi^2$  に従う確率変数  $\chi_{(z)}^2$  を用いて統計量を作り  $t_{(z)}$  であらわす。この統計量

$$t_{(z)} = \frac{z}{\sqrt{\frac{\chi_{(z)}^2}{\nu}}} \quad (74)$$

が従う分布を『 $t$  分布』という。このとき、 $\nu = n$  を  $t$  分布の『自由度』という。

- $t$  分布は  $t_{(z)} = 0$  を中心に左右対称の釣り鐘型の形状をしている。
- $t$  分布の形状は自由度  $\nu = n$  により異なり、自由度  $\nu = n$  が大きいときには標準正規分布によく近似する。

### 9.5.1 標本平均

$N(\mu, \sigma^2)$  に従う  $n$  個の確率変数  $x_i$  の平均を『標本平均』といい、 $\bar{X}$  であらわす。標本平均  $\bar{X}$  は、平均  $\mu$ , 分散  $\frac{\sigma^2}{n}$  の正規分布  $N\left(\mu, \frac{\sigma^2}{n}\right)$  に従う。

標本平均を標準化した

$$z = \frac{\bar{X} - \mu}{\left(\frac{\sigma}{\sqrt{n}}\right)} \quad (75)$$

は標準正規分布に従う。

### 9.5.2 標本分散

標本平均からの偏差の二乗の平均を『標本分散』といい  $V_{\bar{X}}$  であらわす。

$$V_{\bar{X}} = \frac{1}{n} \sum_{x_i \in A} (x_i - \bar{X})^2 \quad (76)$$

標本分散の正の平方根

$$D_{\bar{X}} = \sqrt{\frac{1}{n} \sum_{x_i \in A} (x_i - \bar{X})^2} \quad (77)$$

は標本の『標準偏差』である。

### 9.5.3 $\chi^2$ 統計量

正規分布  $N(\mu, \sigma^2)$  に従う確率変数  $x_i$  を標準化した確率変数

$$z_i = \frac{x_i - \mu}{\sigma} \quad (78)$$

は標準正規分布  $N(0, 1)$  に従うのだから、  
 $N(\mu, \sigma^2)$  から大きさ  $n$  の標本  $A$  についての  
 $\chi_{(\mu)}^2$  統計量

$$\chi_{(\mu)}^2 = \sum_{i=1}^n \left( \frac{x_i - \mu}{\sigma} \right)^2 \quad (79)$$

は自由度  $\nu = n$  の  $\chi^2$  分布に従う。

$\mu$  の代わりに標本平均  $\bar{X}$  を使った統計量

$$\chi_{(\bar{X})}^2 = \sum_{i=1}^n \left( \frac{x_i - \bar{X}}{\sigma} \right)^2 \quad (80)$$

は自由度  $\nu = n - 1$  の  $\chi^2$  分布に従う。

ここで (80) を整理すると、

$$\chi^2_{(\bar{X})} = \frac{1}{\sigma^2} \sum_{x_i \in A}^n (x_i - \bar{X})^2 \quad (81)$$

$$= \frac{n}{\sigma^2} \frac{1}{n} \sum_{x_i \in A}^n (x_i - \bar{X})^2 \quad (82)$$

$$= \frac{nV_{\bar{X}}}{\sigma^2} \quad (83)$$

### 9.5.4 標本分散を使った $t$ 分布

標準化において  $\mu$  に代えて標本平均  $\bar{X}$  を用いた統計量

$$\chi^2_{(\bar{X})} = \frac{nV_{\bar{X}}}{\sigma^2} \quad (83)$$

の両辺の平方根をとり、 $D_{\bar{X}} = \sqrt{V_{\bar{X}}}$  とすると

$$\sqrt{\chi^2_{(\bar{X})}} = D_{\bar{X}} \frac{\sqrt{n}}{\sigma} \quad (84)$$

である。

この  $\chi^2_{(\bar{X})}$  の自由度は  $\nu = n - 1$  である。

$N(\mu, \sigma^2)$  の正規母集団から抽出されたサンプルサイズ  $n$  の標本の標本平均  $\bar{X}$  は

$$N\left(\mu, \frac{\sigma^2}{n}\right) \quad (85)$$

に従うから、標本平均  $\bar{X}$  を標準化した確率変数  $z$  は

$$z = \frac{\bar{X} - \mu}{\frac{\sigma}{\sqrt{n}}} \quad (75)$$

$$= (\bar{X} - \mu) \frac{\sqrt{n}}{\sigma} \quad (86)$$

である。

これらを (74) に代入すると

$$t_{(\bar{X})} = \frac{z}{\sqrt{\frac{\chi^2_{(\bar{X})}}{\nu}}} \quad (74)$$

$$= z \frac{\sqrt{\nu}}{\sqrt{\chi^2_{(\bar{X})}}} \quad (87)$$

$$= (\bar{X} - \mu) \frac{\sqrt{\nu}}{\sigma} \frac{\sqrt{\nu}}{D_{\bar{X}} \cancel{\sqrt{\nu}}} \quad (88)$$

$$= \frac{(\bar{X} - \mu) \sqrt{\nu}}{D_{\bar{X}}} \quad (89)$$

ここで  $\chi^2_{(\bar{X})}$  の自由度は  $\nu = n - 1$  なので

$$= \frac{(\bar{X} - \mu) \sqrt{n - 1}}{D_{\bar{X}}} \quad (90)$$

$$= \frac{\bar{X} - \mu}{\left( \frac{D_{\bar{X}}}{\sqrt{n-1}} \right)} \quad (91)$$

は自由度  $\nu = n - 1$  の  $t$  分布に従う。ここで

$$D_{\bar{X}} = \sqrt{\frac{1}{n} \sum_{i=1}^n (x_i - \bar{X})^2} \quad (77)$$

である。

## 9.6 母平均の差の区間推定

平均値の差の検定で帰無仮説

$$H_0 : \mu_x - \mu_y = 0 \quad (92)$$

が棄却された場合、母平均の差の区間推定を行なう。

### 9.6.1 母分散が既知の場合

$$\frac{(\bar{X} - \bar{Y}) - (\mu_x - \mu_y)}{\sqrt{\frac{\sigma_x^2}{n} + \frac{\sigma_y^2}{m}}} \sim N(0, 1) \quad (93)$$

なので、95 % 信頼区間は

$$-1.96 \leq \frac{(\bar{X} - \bar{Y}) - (\mu_x - \mu_y)}{\sqrt{\frac{\sigma_x^2}{n} + \frac{\sigma_y^2}{m}}} \leq 1.96 \quad (94)$$

である。

これを、第1不等号右辺が  $\mu_x - \mu_y$  となるように変形した

$$\bar{X} - \bar{Y} - 1.96\sqrt{\frac{\sigma_x^2}{n} + \frac{\sigma_y^2}{m}} \leq \mu_x - \mu_y \leq \bar{X} - \bar{Y} + 1.96\sqrt{\frac{\sigma_x^2}{n} + \frac{\sigma_y^2}{m}} \quad (95)$$

が、母平均の差  $\mu_x - \mu_y$  の 95 % 信頼区間である。

### 9.6.2 母分散が未知の場合

$$\frac{(\bar{X} - \bar{Y}) - (\mu_x - \mu_y)}{\sqrt{\frac{\sum_{x_i \in A}^n (x_i - \bar{X})^2 + \sum_{y_j \in B}^m (y_j - \bar{Y})^2}{n+m-2}} \sqrt{\frac{1}{n} + \frac{1}{m}}} \sim t(n+m-2) \quad (96)$$

である。 $t$  分布の両側 5% の臨界値を

$$t(\nu, 0.05) \quad (97)$$

とあらわすと、

95 % 信頼区間は

$$-t(n+m-2, 0.05) \leq \frac{(\bar{X} - \bar{Y}) - (\mu_x - \mu_y)}{\sqrt{\frac{\sum_{x_i \in A} (x_i - \bar{X})^2 + \sum_{y_j \in B} (y_j - \bar{Y})^2}{n+m-2}} \sqrt{\frac{1}{n} + \frac{1}{m}}} \leq t(n+m-2, 0.05) \quad (98)$$

である。第1不等式右辺を  $\mu_x - \mu_y$  とするとように変形すると、母分散が未知の場合の母平均の差の 95 % 信頼区間を得ることができる。

## 9.7 まとめ

- 母平均の差の検定では、差の有無のみが検定される。
- 母平均の差の検定で有意となったのちに、母平均の差の区間推定を行う。
- 母分散が未知か既知かで利用する分布が異なる。
- 母分散が既知の場合は正規分布で検定する。
- 母分散が未知の場合は  $t$  分布で検定する。

## 参考文献

1. 『経済数学教室 1巻』 小山昭雄著 「岩波書店」 1994年5月30日
2. 『新体系 大学数学 入門の教科書 上下』 吉沢光雄著 「講談社」 2022年6月16日
3. 『技術者のための高等数学 7 確率と統計（原書代8版）』 E・クライツィグ著 田栗正章訳 「培風館」 2004年11月30日第8版
4. 『データ解析のための数理統計入門』 久保川達也著 「共立出版」 2023年10月15日初版
5. 『統計学入門』 東京大学教養学部統計学教室篇 「東京大学出版会」 1991年7月9日初版
6. 『行動科学における統計解析法』 芝祐順・南風原朝和著 「東京大学出版会」 1990年3月20日 初版
7. 『計量経済学の理論』 A.S. ゴールドバーガー著, 福地崇生・森口親司訳 「東洋経済新報社」

1970年9月10日 第1刷

- 8.『計量経済学序説』R.J. ウォナコット・T.H. ウォナコット著, 国府田恒夫・田中一盛訳「培風館」 1975年6月10日初版
- 9.『マーケティング・サイエンス』片平秀貴著 「東京大学出版会」1987年4月20日初版
- 10.『回帰分析』佐和光男著 「朝倉書店」1979年4月20日初版
- 11.『完全独習 統計学入門』小島寛之著 「ダイヤモンド社」2006年9月28日 初版
- 12.『分散分析の基礎』高橋敬子著 「プレアデス出版」2009年10月1日